

# 幼児教育における造形表現のフレームについての研究

## Study of frame of preschool children's formative expression.

杉山 明博・倉賀野由子・杉山 理絵

SUGIYAMA Akihiro・KURAGANO Yuko・SUGIYAMA Rie

### 1-1. はじめに

本論は幼児教育における造形表現教育の質の標準化を思考するための、考え方のフレームについて、大学教育と現場の教育の二つの側面から論じたものである。

現場での造形表現を、デザイン・立体造形と絵画表現の二つの内容から分析考察をしたものである。

造形表現の授業は、形を通して、子どもたちが夢を見る力、それを実現するための力と資質をつけるためのものである。感性豊かな、人格の美を持つ生き生きした子どもたちの育成が出来る学生を送り出すことである。そのため形を通した発想力、造形力で、自らが新たな世界を創造できる変換力と人間のために役立つ、広く社会のために役立つ、汎用性のある力をつけるためのプログラムを構築し、実施しなければならない。さらに大学教育の内容は卒業後に起りうるであろう多くの問題に有効(潜在有効性)に対処出来るモデルでなければならない。

### 1-2. 大学力と自分力の共生

「自分の人生を生きていないのではないか」と、ふと取り返しのつかない不安がおそう時がある。生きている面白さ、楽しさとまったくかわりのない何かの軸で生きてきたのではないかと愕然とする。諸学に通じて知識が厚く、その意識のバールを持ちつつ、つまらなく生きていることが多い。豊かな知恵を加えて楽しく生きたい。生きることは実感をともなって面白くなくては意味がない。そのために造ることによって多くを創造し、誕生させることである。一日も早く自分を生きたい。

一人一人の学生が自分の人生を生きるために、個性的な展開の出来る教育システムでなければならない。

そのために大学教育は二つの側面を持つ必要がある。一つは大学の持つ教育システムと担当教官の研究成果の還元としての独自性のある内容である。そのシステムは卒業後も有効に研究や仕事に生かせるものでありたい。これを大学力と考えたい。

もう一つは、一人一人の展開が個性的な成果として、目に見える形で評価出来るものである。組織のシステムでアノニマスになるのではなく、自分力として、独自の研究領域の展開が期待できるものである。

これらの二つの力が共生できるフレームが必要不可欠なのである。そのための方法と造形表現の内容

について考察を進めていく。

### 1-3. 質の標準化と個性化のためのデザイン・フォーマット

デザイン・フォーマットは基本的内容を標準化出来、その枠組みの中で自由に個性的な展開が可能である。プロセスのすべてが可視化され、自己点検出来、他者とも比較可能である。教師側からすると、一人一人のよさの発見から、支援、指導がプロセスの中でいつでも行えるフォーマットは、発見し、考え、創造的に展開できる思考の下敷きのようなもので、学生の創造的解釈によってより有効化されていく。

竜安寺がそうであったように、枠組みがあるからこそ、その中で自由な発想が出来、素晴らしい作庭ができた。限界があるからこそ、無限の可能性が開かれる。修学院離宮のように、まったく自由な作庭となると、自由すぎて、かえって困難になってしまう。

学生達にとっては、造形表現手法におけるフォーマットと言う枠組みは、大いに意味を持つと言える。

### 1-4. 過程「内」創造で変換する

制作のプロセスが見える化（可視化）されるフォーマットにより、造形表現過程の内に身をおき、手を使い、頭を使い、悪戦苦闘し、課題を定着させていく。

ものを造ったり、考えたりするプロセスの中で、蓄積されていくものはなんだろうか。形をいろいろと考え作り方を工夫する中、新しい考えを生み出す中で、三つの創造力、すなわち、「技術的創造力」と「造形的創造力」と「論理的創造力」が必要になる。この三つの力が蓄積を生む大切なものである。

「技術的創造力」は、小刀やのみの使用方法や道具など、加工にかかわる一つ一つの細かなディテールにおいての工夫であり、自分で考え出し、工夫した技術的加工上の創造的な方法であり、この創造的研究態度が蓄積を生んでいると思われる。

「造形的創造力」とは、デザイン力を含め、形を考えたり、造ったりするときの工夫と特に有機的形態のフォルム形成力と言えるもので、トレーニングと感性によって生み出されてくる。

「論理的創造力」は物を思考するプロセスの中で、新たな考えを形成したり、既成のものに創造的な視点を与えたりするものである。この三つの創造力は形やものづくりや思考のプロセスの中に自らの身体を置いてこそ、可能となるもので、これが過程内創造と言えるものである。

このプロセスの中に身をおいて、テーマ発見や創造的変換をし造形表現をしていく。さらに、デザイン発想力や、知的人格形成もなされ、多くの力が蓄積されていく。

### 1-5. 造形表現内容のフレームに盛り込むもの

造形表現授業で培う「力」は一人一人の造形力、デザイン力、造形表現の教育力、環境デザイン力形成力、幼児教育デザイナー力などが主に考えられる。造形力・デザイン力については、子どもたちの造形教育を行う上で、美や人格に対する感性から、自らテーマを発想し、デザインし、造形できる力が必要となる。自分が出来なくては、支援、指導は不可能である。造形教育力は、子どもたち一人一人に対応し、発達段階に適應する幼児の造形教育システムと実践力が要求される。環境デザイン形成力は幼児教育における環境すべてにおいて、デザイナー頼みでなく、自ら創造的環境改良が出来、具体化できる造形力を持つことが望まれる。

次に幼児教育デザイナー力としては、環境のみではなく、園服から机や椅子、マークのデザイン、給食用の道具立てなど、すべてにわたって現場の経験を生かしてのデザイン力を持ちたい。幼児教育者はよき「幼児教育デザイナー」でありたい。

授業の具体的な内容に盛り込むものとしては、感受性を豊かにし、驚くことの発見のできる力を身につける。多様な表現力をつける。学びと遊びの一体化ができる。分析から創造へのベクトルを持つ。手と頭の共生する「巧」な力をつける。汎用性のあるテーマ発見のできる力をつける。

感性を豊かにするために、日常の中の美の発見から小さな不思議に驚く心や目を磨くこと。絵画的表現だけでなく、デザインの汎用性のある思考力や各種立体の造形力や発想力を身につける授業展開をする。保幼小一元化の視点から学びを遊びの中に入れ、体感出来るシステムデザインの設計ができることがのぞまれる。

幼児教育現場や絵本、玩具他をよりよい創造のために分析し、新たな可能性をデザインできる力をつける。頭だけで抽象的に考えるのではなく、手と頭が共生する共通感覚を持った「巧」な人を育てる。何が問題なのかといったテーマ発見力を身につけ、ただ造形表現に終わるのでなく、何かに役立つ発想力、汎用性のある表現に視点を当てる。自分自身を客観的に見ることができ、人にも自らの表現の意味をプレゼンテーション出来る手法を身につける。これらを実現するためにさらに付け加えるなら、創造のヒエラルキーを身につける必要がある。外在化、顕在化、研究化、仕事化といった発想から定着までの段階性を考えることが望まれる。外在化はひらめきを目に見える形で外に出す。顕在化は、明確なテーマとして位置付ける。研究化は、テーマを深く掘り下げ、創造的に飛躍させる。仕事化は、研究を具体的に定着させ、社会貢献でき、現場で役立つものとする。大学教育で特に欠けていることは、研究で終わってしまって、仕事化へのベクトルを持たないことが多いことではないか。

以上、造形的手法と内容のフレームについて論じてきたが、変換力と汎用性のあるフレキシブルなシステムで、幼児教育のよりよい方向づけをして行きたい。

変換力は、色々な事柄をその子なりの経験の蓄積された感性で変換し、新たな造形物につくりあげていくわけである。

単なる作品づくりの良し悪しだけでなく、何らかの意味を持つ汎用性として、美的に社会的に人間にとって役立つものでありたい。

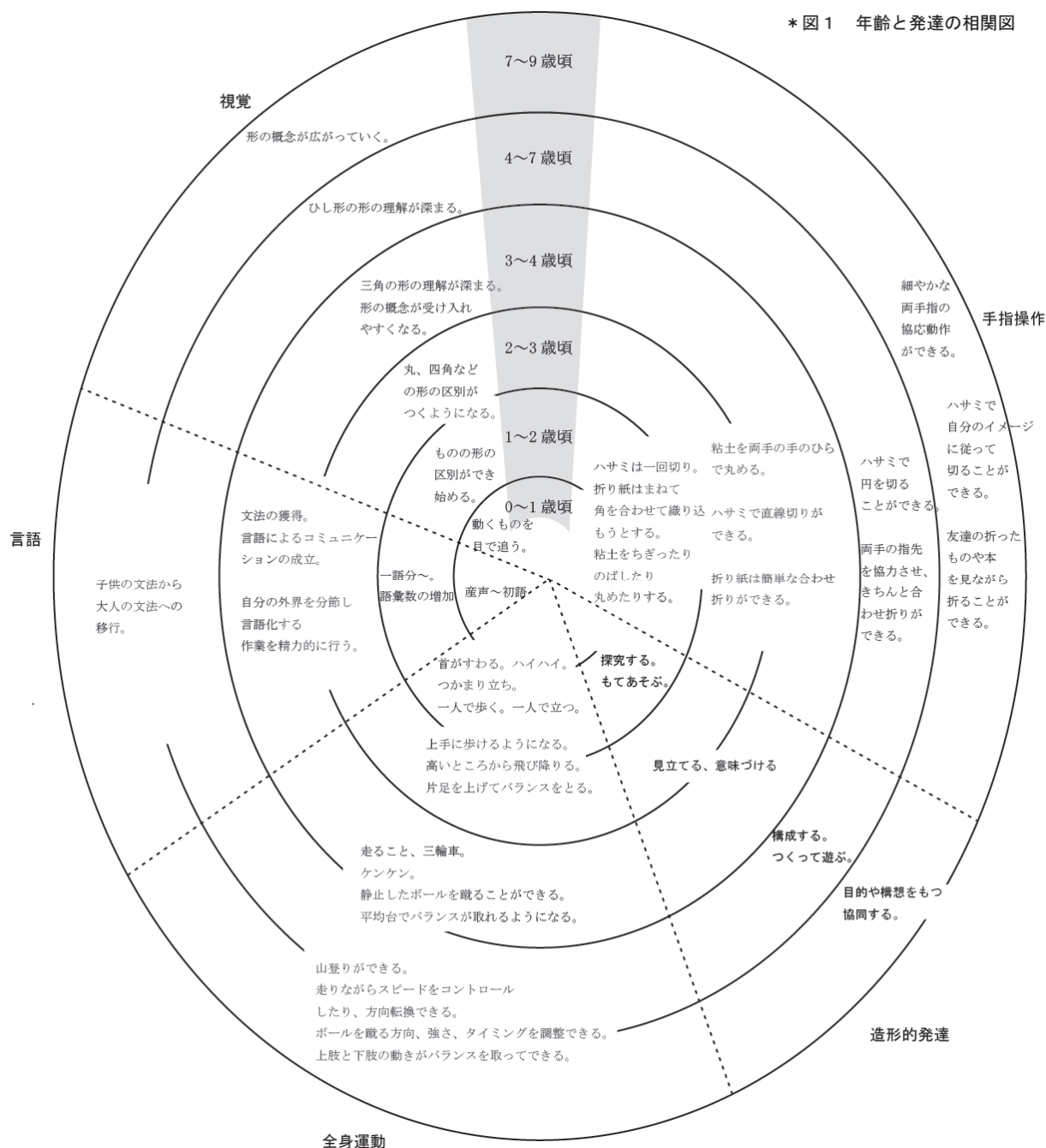
## 2. デザイン（平面・立体）・立体造形のフレームについて

### 2-1. 幼児期の身体的発達における立体造形フレーム

幼稚園教育要領解説の第2章「ねらい及び内容」第1節「ねらい及び内容の考え方と領域の編成」のなかで、「幼児の発達は様々な側面が絡み合って相互に影響を与え合いながら遂げられていくものである。各領域に示されている『ねらい』は幼稚園生活の全体を通して幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうものであり『内容』は幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されなければならないものである」とある。これは幼児教育とは各領域を超えて相関的に行われるものであり、造形表現を行うにあたって考慮しなければならない重要な部分であると言える。実際には身体的発達には個人差があり、一概に年齢で区分できるものではない。しかしながら造形表現の総合的な研究をする上で一般的な年齢における発達段階を図式化していき

い。

身体的発達には嗅覚や聴覚など様々な器官があるが、ここでは主に造形表現と密接に関わる「視覚」「触覚」「言語」「全身運動」「造形的発達」についてまとめていく。絵画表現をする際、なぐり描きを経てものの形を認識するためには基本的な丸や四角などの形が区別できることが前提となってくる。そのような意味でも視覚の発達とともに造形要素が広がっていくのがわかる。また言語とはコミュニケーション手段の一つであり、造形表現の役割に感情や思いを伝える伝達表現があると考えれば文字もまた造形表現の一つということができる。言語的思考と造形的思考の違いについては後に触れることとし、今は造形表現に深く関わる発達要素を分類しておく。（＊図1）



## 2-2. デザイン的表現（平面・立体）・立体造形のフレーム

次に幼児のデザイン的表現（平面・立体）・立体造形の全体像を把握していきたい。

一般的な芸術的表現と違って汎用性のあるデザインを幼児教育に取り入れるのは非常に難しいことである。しかし、遊びを通して実生活に役立つモノづくりをすることで比較的スムーズにデザイン的感性を育てていくことができるのではないかと考える。ここでは現在幼児教育の中で主に行われている題材を中心に大きく3つに分類することにする。その3種類とは①平面的デザイン②立体的デザイン③立体造形表現、である。

- ① 平面的なデザイン表現とは実生活の中で使用できる機能を持った造形表現の中で特に平面的な作品を指すこととする。立体に比べて作業スペースをとらないことから比較的容易に制作することができる。現在行われている主な平面デザインは・発表会の看板作り・オリジナルTシャツ作り・誕生日やクリスマスカード作りなどで、外部に向けて発信する要素を持ち合わせているものが多い。
- ② 立体的なデザイン表現とは、平面的デザインと同じく実際に使用する機能を持つ汎用性のある立体造形のこととする。仕上がりが比較的小さな陶芸のお皿作りや劇に使うお面作りなどから舞台装置作り、園内に飾るこいのぼりの制作、運動会のゲートの作成や段ボールなどを使った家づくりは子供たちが協力しながらデザインする必要があるため、想像力とともに協調性やコミュニケーション能力の発達も期待できる。環境によって表現が制限されることがないように広い場所の確保や汚れても気にならない準備をしておくことが望まれる。
- ③ 立体造形表現とは使用目的を伴わない造形を指すこととする。粘土遊びの中でも好きな動物を作ったり、壁面や空間を装飾するオブジェの制作、いろいろな種類の木片をつなげて形にする木片遊び、紙を折ったりつなげたりしながら町を作るなどの保育が行われている。使用目的を伴わないため自由に表現することができるが、その分保育者による子供たちのモチベーションを高めるための支援が重要になってくる。主に自己を見つめ表現するといった情操教育が目的の課題である。

扱うテーマ・題材の具体例及び全体像

	主なテーマと題材	身につけたい能力
平面的デザイン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表会の看板作り</li> <li>・オリジナルTシャツ作り</li> <li>・誕生日、クリスマスなどのメッセージカード</li> <li>・テーブルクロス作り</li> <li>・七夕の飾り作り</li> <li>・画用紙を使ったホチキスバッグ</li> <li>・卒園記念のタイル壁画 など</li> </ul>	基本的なコミュニケーション能力 <b>インフォメーション・デザイン (information design)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・色彩感覚（コントラスト、リズム感）</li> <li>・イメージを外在化する方法</li> <li>・相手に伝達しようとする努力</li> <li>・切る貼る描くなどの基本的な表現技法 など</li> </ul>
立体的デザイン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・陶芸でお皿を作る</li> <li>・劇に使うお面作り</li> <li>・舞台装置作り</li> <li>・季節の行事、こいのぼり作り</li> <li>・運動会のゲート</li> <li>・皆で遊ぶための段ボール家作り</li> <li>・卒園記念のレリーフ など</li> </ul>	<b>目的のあるフォルムを作る造形力 (versatility form)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・道具の使い方</li> <li>・生活をより豊かにしようとする気持ち</li> <li>・目的のための創意工夫</li> <li>・相手を思いやる気持ち など</li> </ul>



立体造形表現	<ul style="list-style-type: none"> <li>・粘土で動物や自分を作る</li> <li>・トーテンポール作り</li> <li>・画用紙を折り曲げて自分の街を作ろう</li> <li>・廃品（異素材）を使ったロボット制作</li> <li>・手作りカメラと思い出アルバム（平面）</li> <li>・砂場遊び など</li> </ul>	美しい形を作る造形力 <b>オーガニック・デザイン</b> (organic design) <ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な材料と触れ合う</li> <li>・表現することの充実感</li> <li>・美的感覚（バランス感覚）など</li> </ul>
--------	---	--

上記のようにデザインの表現と立体造形の全体像を分類してみると、それぞれの題材を通して経験的に個人の情操教育から協調性やコミュニケーション、ひいては生活をより充実したものにしようとする意欲を身につけられることがわかる。身につけたい能力は便宜的に区別したが、例えば色彩感覚一つとっても立体表現ではさらに裏側や上から見た場合の色彩まで注意を向ける必要があり、それぞれ平面のみ、立体のみで培う能力ではないということを付け加えたい。

これまで子供たちの心身の発達段階と、現在行われている幼児教育における造形表現の全体像について一覧表にし、分類してきた。幼児期の発達段階と比較することで造形表現教育が担うべき能力の支援がより明確になったと思われる。次項では先程述べた言語的思考と造形的思考の違いについて詳しく見ていくこととする。

### 2-3. 造形的思考力をベースとした造形表現力の分析

そもそも子供たちにとって、造形活動とはどのようなものであろうか。それはなぐり描きなど自然発生的な発達に始まり、遊びの中からその時々感情を表現したり、感動を伝える手段として出発していく。子供たち自身の内面的な活動を豊かにし、感性や想像力を働かせて個々の世界を豊かなものにし、洞察力や意欲、創意工夫を通して表現していくものである。表現するだけなら言語表現だけでも十分のように感じられるが、言語的表現と造形的表現ではそもそも成り立ちが違うため表現される内容に大きな違いがある。

言語とはその国々の人にとって共通のルールによって成り立っている。言語的思考 (Verbal thinking) はいわば集中的思考ということができる。集中的思考はひとつの答えがあり、正解、不正解といった考え方が存在する。言語表現には共通言語を知っているという約束のもとで成り立つのである。それに対して造形的思考力 (Visual thinking) は非言語的思考力 (Nonverbal thinking) であり、正解のない拡散的思考だということができる。造形表現がそれぞれの内面から発生している以上同じものなど一つもないのは明らかであり、違いを感じ、認めることで共生しようとするのが造形的思考力である。昨今コミュニケーション能力の低下が言われているが、メールや SNS などの普及によって文字だけのコミュニケーションが増えてきていることで対面して交流したときに感じる息遣いや感情といった非言語の部分を感じ取る機会が減ってしまっている。そのような相手の思いを感じ取る機会が少ないことで、コミュニケーション能力が育ちにくくなってしまったのだと考えることができるのではないだろうか。このような伝達能力を育てる上でもモノの中から想いを読み取ろうとする造形的思考が重要であると考えられる。

また造形的思考のもう一つの特徴として「モノとの関わりの中で考える」ということがある。このハ

ンズオン（hands-on）学習により無心に材料と関わりながらこれまでの経験と考え合わせイメージが広がった時に「ひらめき」として新たな展開が生まれる。それは経験の中でしか生まれないものであり、発想力のある人材に育てるために非常に大切な要素である。このように経験の中から培われる力にはどのようなものがあるのだろうか。その力を分析し、具体的にどのように指導、体験していけば良いのかを考察していくこととする。

#### 2-4. デザイン（平面・立体）と立体造形表現に必要な要素

造形表現には主に3つの要素が必要であると考えられる。それは「発想・想像力」「技術力」「伝達力」である。

「発想・想像力」はイメージを内包している。造形活動では作る前にある程度作品のイメージを思い浮かべていることが多い。またものとの関わりの中からイメージが飛躍、発展し、深化することで自分の思いをより正確に表現できるようになる。最初のイメージから次のイメージへの連鎖的深化が創造活動のみならずその後の人生においてより発展的な生活、仕事を生み出す核となる部分であり、幼児期にイメージをする訓練を行うことは極めて重要である。

「技術力」とは安全かつ効率的に道具や材料を扱うことであり、保育者の指導が必要となってくる。最近美術教育のなかで、指導するのか、支援するのかといった子供たちのどこまで踏み込むべきなのかが問題になっているが、いくなれば発想・想像力は声掛けなどにより「支援」していく部分であり、初期の技術力は安全性の面からもしっかり「指導」していく部分だといえよう。道具の使い方によって創造的意欲が失われたり、苦手意識を生んでしまうのはただの放任であり教育とは言えない。子供の状況によって見守る姿勢は必要であるが、技術指導も時には必要となってくる。

造形活動は伝達の表現であることは述べたが、「伝達力」とはまさにそのことである。伝達の中にも自分自身の気持ちを整理し、客観的に見つめ直す自己内伝達と他者に対して伝えようとする他者伝達がある。どちらの伝達に関してもイメージ通りに出来上がるとは限らない。自分のイメージと感情、技術などをフィードバックさせながら探求する姿勢は試行錯誤する習慣を身につけさせ、粘り強い精神を養うであろう。教育的に非常に意義のある行為である。また完成したときの喜びは豊かな感受性を作り、うまくいかなかった場合でも保育者の声かけによって再び表現しようとするチャレンジ精神を育成していく。

#### 2-5. デザイン（平面・立体）・立体造形と遊びについて

造形活動の3つの要素を踏まえた上で実際にどのように造形活動を進めて行けば良いのかを考察していく。造形活動とは「触って見たら何かが生まれた」「なんだか楽しい」という遊びの中から発生した活動であり、そこから表現する充実感や心の豊かさにつながっていく。よって造形教育であっても子供たちにとっては遊びの中から自然発生するものであることが望ましい。例えば粘土遊びは道具を使用しなくても幼児の意のままに表現できる素材である。素材に直接触れ、その出会いの中で感覚を働かせるようなインタラクティブ（interactive）な体験がデザイン（平面・立体）・立体造形の導入としては非常に有効である。

遊びと言っても実際にはいきなり動物や人物作りといった小学校の図画工作のような活動をしてしま

うこともある。遊びが自発的なものだと考えると、保育者の考えた遊びが子供たちにとっては勉強になってしまう恐れがあることに注意して進めていく必要がある。まずは素材に興味を持ち、イメージを膨らませるためにハンズオン（hands-on）学習を行いたい。素材に触れ、五感を働かせて体感するのが望ましい。すなわち何かを目的とするのではない、いわば無目的な活動を十分に経験させることで子供たちの中に何らかの動き＝遊びが生まれるのを待つのである。待つといってもただ見守るだけではなく必要に応じて声掛けといった支援をすることで子供たちの動機づけを行うことが重要だろう。

無意図的な動作を繰り返していると、素材からのアプローチにより造形的思考力が芽生え、具体的な作品とはいかないまでも意図的な試みがなされるようになる。この時保育者の働きかけによって汎用性のあるデザイン活動を行うことができれば日常生活の中で表現する意欲を育て、イメージを豊かにし、細やかな感受性を養う大切な場となるのではないだろうか。

このように汎用性のある造形表現は子供たちにとって難しい課題ではあるが、遊びに取り入れてデザインを行うことで自然に行うことができる。また造形的な活動ばかりでなく精神的な発達や人格形成の面からも良いチャンスになるだろう。体験的に身につけた表現能力はコミュニケーション能力や創造性へと発展し、より良い人生に導いてくれるものと確信している。

今後は遊びの中の学びに焦点を当て、本論で分類したような造形表現を遊びながら学ぶための方法について考察していきたい。主体的で自発的な行為の中で楽しく経験しながら表現能力や発想力を鍛えるためには具体的にどのような支援が必要なのかについて研究していく必要があると考える。

### 3. 幼児教育現場から造形表現のフレームを考える

#### 3-1. 現場からの考察と視点

幼児教育の造形表現に関わってきた経験の中から、幼児の観察により、フレームを考察する。まず、日々の生活の中で、道端に咲く花、雨上りのクモの巣の美しさ、夕焼けの空の移ろい、落ち葉の色、落ち葉を踏んだ時の音や感触、キンモクセイの香り、泥遊びの土の感触、七色に輝く虹などの四季の変化や自然の美しさに「わぁ、きれい。」「すごい。」「気持ちいい。」と感動する姿が少なくなっているように思われる。「自己表現」の根本となり、「生きる力」につながる体験を通して、感動する心を育てることが大切である。

また、驚くことが少なくなってきた。美しい花を見ても、誕生日で皆でケーキを食べても、きれいな服を着ても、心が動いて感動することが少なくなってきた。喜怒哀楽の心の動きが少なくなってきた。自己表現に行く前の問題ではないのか。手をはじめとして、身体全体の動きが鈍くなってきた。道具や描画材の扱いにしても、手が動かなくなっている。これは、目、手、頭の相関が出来ない事に通じる。皆で一緒に遊んだり、共同作業をしても、会話をし、お互いをわかり、自分の意思をしっかり持って、仲間とうまくやっていけないことが多くなってきた。コミュニケーション不足になっている。

このような現状では、創造的な発想力を全員に求めるのは困難であり、多くの工夫が必要となる。

造形表現は幼児に日常的な出来事に対しての発見や驚きの気持ちを取りもどし、本来あるべき豊かな感性による情動を持たせることが出来る。全体的なバランスのとれた人格の形成、心身ともに健康で五感



が働き、感性豊かで感受性があり、発想力もともなって創造的な生きる力が身につくものでありたい。多くの周辺とのかかわり、五領域との相関の中で、拡散的に広がるイメージを造形表現に収斂させていく手立てを考え、成長をうながしていきたい。

絵画表現は、その源を豊かにするような日々のくらし遊び、活動、表現媒体である絵画に関連する周辺領域を含み、発達していく。

そのためには、幼児期に適した非言語コミュニケーションの手段を豊富に持ち、表現したくなる手段を状況に応じて提供できる専門性を身につける必要があり、絵画表現は有効な手段となる。

驚きや、何かを表現したいという自分なりの思い、やりたいと感じる方法との出会いが、子どもの表現意欲を高め、表現を支える心身の機能を向上させ、結果的に現れる表現を豊かにする。

俗に言われている発達段階ということは、現代の子どもたちにおいての環境や育児により、同じ年齢の子どもでも大きく差がある。時代の変化と共に、便利な遊び道具も増え、情報量も多く、子どもの脳と言葉と行動とがバランスよく育っていないのではないかと思うことがよくある。これは絵画表現においてのみでなく、転んでも手が前に出ない子、転んでも起き上がれない子、言葉では驚くべき知識がありよく発言するが自分でやるとなると出来ない子、思い通りにいかない子、思い通りにいかないとキレる子、あきらめる子が多くなった気がする。これは、子どもが転ぶ時期に転ばせないで、親が危険を察知して手を出す、また転んでからも自らの手で起き上がるのを待てずに親が抱き起す。このような愛情が、少しずつ子どもの身体能力を低下させているように思う。

絵画、造形においても、時代の変化と共に様々な玩具やゲームが増えて、当たり前のように広告の裏に絵を描いていた時代ではなくなっている。

### 3-2. 表現のための拡散と収斂

しかし、遊びの中では、クレパスの箱が車やバスになり、つなげて電車になり、電話にもレジにもなる。抽象（象徴）化して、見立てられ、豊かな発想力が発揮される。遊びの中では自由で、柔軟で、思考に飛躍がみられ、拡散的思考が芽生えていることがわかる。

仲間とかかわり、試行錯誤し、自己主張し、情動体験が蓄積されていく。自分の存在も意識づき、達成感に満足できる。

造形表現は遊びのごとく主体的に自己を主張し、自由に表現する発端として全体的人間としての人格の形成に始まって、五領域のすべてと関わりながら、心身ともに健康で、豊かな感性と、創造的発想力を育てていく。

造形表現過程と結果において、自由で拡散的で、柔軟性、独創性を発揮するように指導、支援し、発想力をつけることは、将来社会で生きていく中で出合う様々な課題を克服するのに役立つ。創造性、発想力こそがこれからを生きのびるカギになるであろう。造形行為として、変換し、汎用性の拡大を図りながら、作品として収斂させることになる。

このような意味を持つ造形、絵画表現は、保育における現代の課題に対しても有益な教育効果を持つと言える。

自由な発想力がつくことにより、造形表現を通して、それぞれが思う方向へ変換されていく。この変換力こそが新しい切り口、新しい論点を開くことにつながる。変換される内容が幅広くあらゆる方向の発想、表現が生まれるよう支援し、指導してゆかなければならない。うまく描こう、うまく表現しよう

といった目に見えない評価の目を気にするのではなく、自由奔放に表現できる遊び心を育てなければならない。適当で「いいかげん」な恣意性から、いい調子の「いい加減」をつくりだすことが大切なのではないか。

自由な発想は、ブレーストーミングのように、幼児の発想を否定することなく、出来るだけ沢山色々な表現をさせることである。そして、友達の実似も認めてやり、むしろまねることを勧めること、友達の発想や表現に付け足して自分の表現をしていくことも許すことである。

このようにして拡散させたものを、それぞれの作品の定着といった形で、収斂させていくことも必要不可欠である。開かれたものを、自分の作品としてまとめていくことは、幅広い汎用性への変換でもある。

充実した内容の豊富な拡散は、作品づくりをより豊かなものとし、表現力も増してくる。段階的に造形表現の密度も増し、汎用性を無意識のうちに考える潜在能力も身についてくる。

拡散と収斂を交互に行うことにより、造形表現を超えた人間力が身についてくる。拡散によって幼児は、沢山のアイディアの宝庫をもつことになる。

これらの方法を身につけることは、将来生きていく上で、仕事の中で生かすベースとなっていく。小学校入学までにこの力をつけることは、真の学力向上につながってくる。

真の学力は暗記で得た知識のみでなく、自由な自分自身で積み上げられた、蓄積された発想力と言えるのではないか。

3-3. 五領域と表現との関わり

おさえなければならないフレームとして、造形表現は、五領域との相関について考えなければならない。単体で存在するのではなく、全体との関わりの中で、バランスのとれた生きる力を身につけられ、人格が形成される。

造形表現は、感じたことや考えたことを表現することを通して、豊かな感性や表現力を養い、汎用性のある幅広い創造力を身につけることにある。

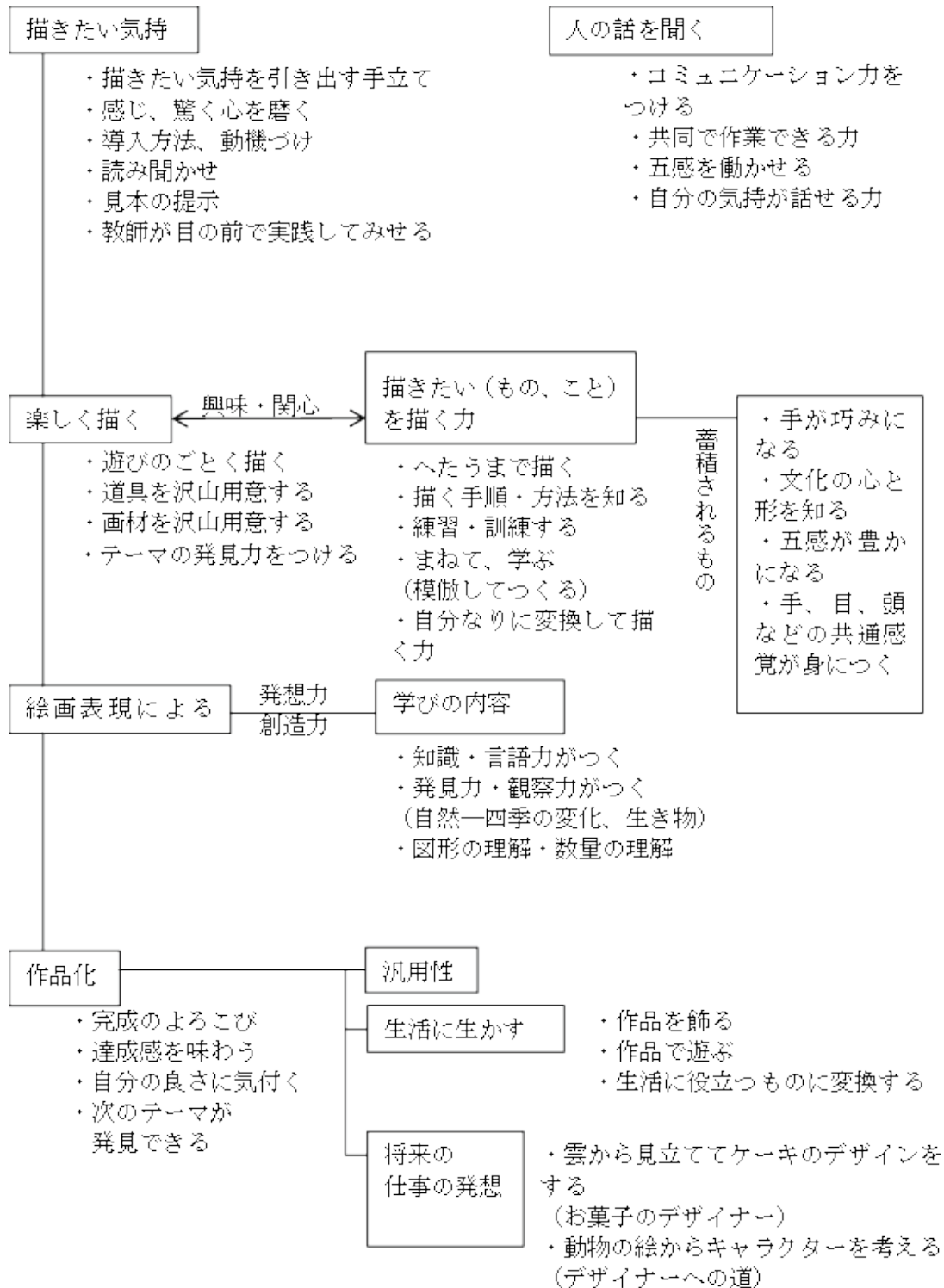
造形表現と五領域との関わりを図にしてみる。この相関の中で子どもたちは真の人間力をつけるものと考えられる。

健康と造形表現とのかかわり		造形表現と環境とのかかわり	
・心身ともに健康であってこそ、豊かな感性と表現力は育まれる ・手が器用で体全体の働きが健康であると造形力が増す		・豊かな自然の変化の中の美しさに興味と驚きをもって表現する ・生活や道具的に豊かな環境で表現は実る	
健康		環境	
健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくりだす力を養う		周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う	
造形表現			
他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人とかわる力を養う		経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う	
人間関係		言語	
・仲間として共同作業ができる ・相手を思いやり協力して作業できる ・自分の存在感が生まれ、生きるよこびにつながる		・言葉で考え、イメージをふくらませて造形表現が豊かなになる ・人の話や内容が理解でき表現につながる	
人間関係と造形表現とのかかわり		言語と造形表現とのかかわり	

五領域と造形表現とのかかわり

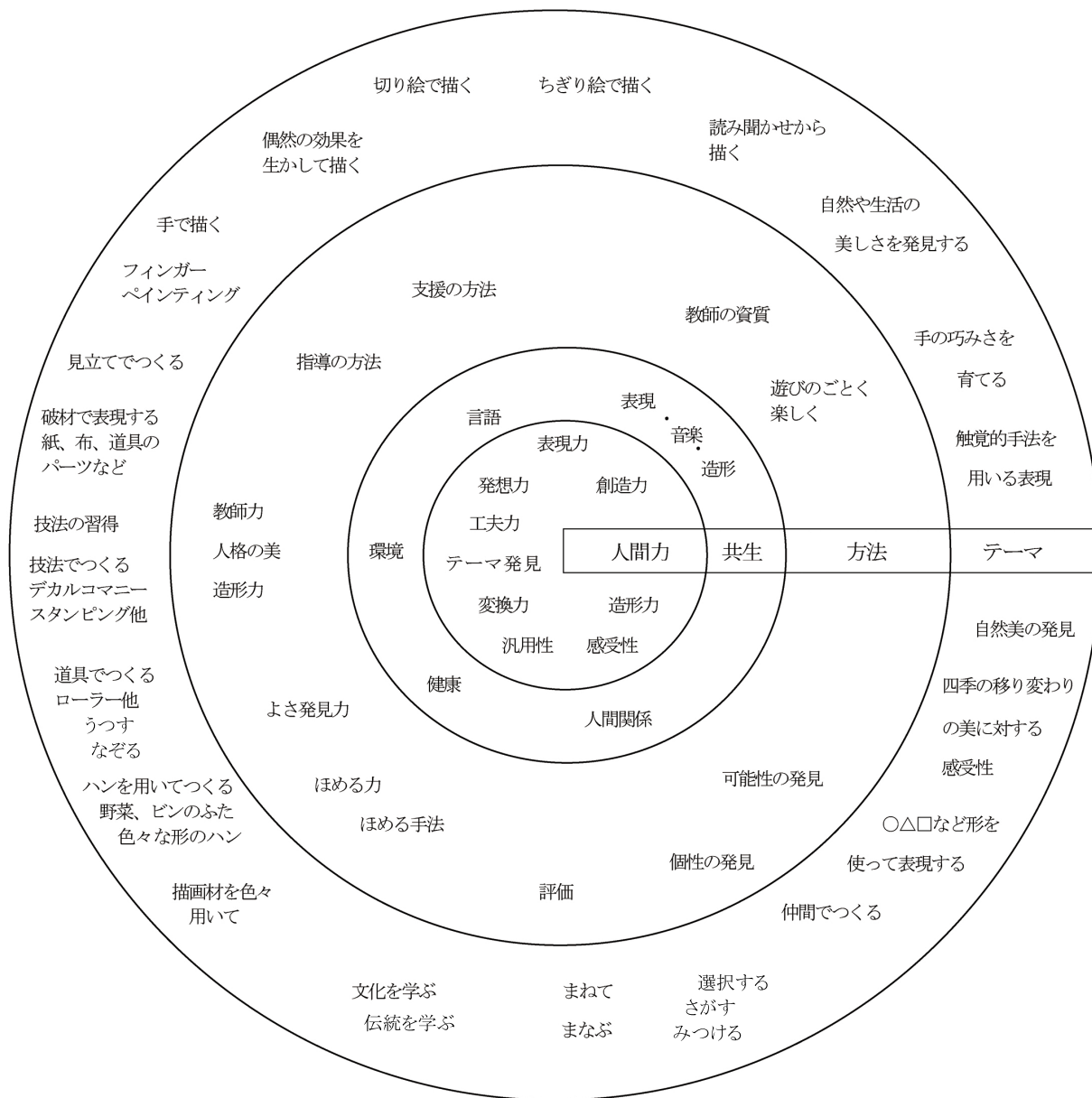
### 3-4. 絵画表現の動機づけエレメント

絵画表現の授業で幼児と関わってきて、大切だと思われる手法について考察してみる。興味を持って描きたい、表現したいという気持ちになること。楽しく遊びのごとく描ける状況をつくり出す手立て、描ける力としての技法を身につける方法、さらに表現の成果としての作品、多くの学びの内容、それらが将来的にどのような汎用性をひらいていくのか、さらに仕事に結び付くヒントになるなど、いくつかの要素を図式化してみた。



### 3-5. 絵画表現のポートフォリオ・バランス

以上述べてきた絵画表現におけるいくつかの視点に加え、多くの課題の実践（紙面の都合上割愛した）から抽出した内容を下記のごとく図式化し、幼児教育における絵画表現のフレームを考えてみた。これはリスクを可能な限り回避するポートフォリオ・バランスと言えるのではないかと思う。



以上大学及び幼児教育現場からの実践を通して、造形表現のフレームについて考察を進めてきた。

質の標準化をし、豊かな内容を保持しつつ、一人一人のための一つ一つの教育により、個性化をしていく。このことにより、真の人間力を持ち、生きがいのある人生を送れる造形表現力が培われることになる。大学では可視化されたフォーマットを用いたシステムによりなされる。幼児教育の現場でも、すべてが見える化されるため、プロセスと成果が明確に把握でき、支援と指導が有効に働くことになる。変換力と汎用性といった、今後幼児教育において特に大切な力が以上の方法により実現される。今後より理想的なフレームについて研究を進め、深めたい。



## 引用文献、参考文献

1. 布川亀久弥（1970）「創造性の科学」日本放送出版協会  
杉山明博（1993）「発想の図式」東洋館出版  
杉山明博（2005）「発想する発見するデザインフォーマット」明治図書
2. 引用文献  
文部科学省（2008）「幼稚園教育要領解説」第2章第1節  
参考文献  
高杉自子・柴崎正行・戸田雅美編（2001）『保育内容「言葉」』ミネルヴァ書房  
武藤隆監修・倉持清美編者代表（2007）『領域 健康』萌文書林  
編集委員8名（1982）『造形美術教育体系1 幼児教育編』美術出版社  
岸井勇雄・武藤隆・柴崎正行監修 榎沢良彦編著（2006）『保育内容・表現』同文書院  
河邊貴子（2005）『遊びを中心とした保育』萌文書林  
鯉坂二夫監修 永井肇編著（1995）『表現・幼児造形＜実習編＞』保育出版社  
花篤實・岡田愼吾編著（1994）『幼児教育法講座 造形表現 理論・実践編』三晃書房  
鈴木祥蔵（1989）『鈴木祥蔵幼児教育環集2 ことばを育てる』明石書店  
花篤實監修 永守基樹・清原知二編集（1999）『幼児造形教育の基礎知識』建帛社  
平田智久・小林紀子・砂上史子編（2010）『最新保育講座⑪保育内容「表現」』ミネルヴァ書房  
鮫島良一・馬場千晶著（2014）『保育園・幼稚園の造形あそび』成美堂出版  
辻泰秀編著（2014）『幼児造形の研究 保育内容「造形表現」』萌文書林
3. 小川博久他（1976）「子どもの権利と幼児教育」川島書店  
M. サイム著 星三和子訳（1980）「乳幼児の考える世界」誠信書房  
横地清他（1978）「文学と数は教えるべきか」日本放送出版協会

執筆分担 1-1～1-5 杉山明博 2-1～2-5 倉賀野由子 3-1～3-5 杉山理絵

